

2007年9月9日(日) 30年ありがとう 開館30周年記念感謝デイ 報告

晴れ渡る空の下、フリードリンクやギャラリートーク、ジャズライブが開催され大盛会だった感謝デイ。「西武新宿線の車内広告を見て」「ポストにチラシが入っていたから」と、これまで美術館を訪れる機会がなかった近隣の方々が、続々と家族連れでいらしてくださいました。

◎「おかわり下さい！」



今日は特別！安曇野のりんごジュース、有機栽培のコーヒー、アイスティが自由に選べて何杯でも無料です。中庭にはテントを設置し、芝生の上でくつろげるスペースも。夏の日差しが照りつけたこの日、1番人気はりんごジュースでした。「おいしかったです。」「何杯でも飲んで嬉しい！」「次は何を飲もうかな。」と、楽しそうな声が聞こえてきました。

◎母・ちひろと暮らした思い出



「ようこそ！ちひろの家へ」展の目玉の一つ、新築当時（1952年頃）の居間兼アトリエを再現した中でちひろの1人息子・松本猛のギャラリートークが行われました。

松本猛：僕の記憶が始まった頃、窓の向こうにはずっと秩父連山、その奥に富士山が見え、この辺りは麦畑でした。新青梅街道はなく、今お蕎麦屋さんがある付近は森で、近所の子も達が森まで肝試し。そういう牧歌的な時代の中で母は絵描きとして仕事を始めます。

この大きいソファに編集者が座っていて画机で母が絵を描いている。母は誰もいないとなかなか筆が進まない人なので、編集者の人は仕上がるまで必ず待っていました。するとそのうちご飯の時間になったり、お風呂に入れるとか、僕を

寝かせるとか、色々な事がおこるわけです。母は僕を寝かせつけようとするのですが、僕は母が「寝かせつけなくちゃいけない」って焦っているのがわかるわけです。そうするとわざとなかなか寝ないんです。絵本なんか読んでもらっているんですけど「もっと」といって散々困らせる。それでも母はそーと抜け出してこちらで仕事にはいる。すると僕はばちっと目を覚まして布団をずるずる引っぱり、母が座り机で描いている後ろに布団をひいて触りながら寝て。このソファには編集者が「あの息子、なんとかなんないかな」と思っている、そういう状況で母は絵を描いていました。

母がよく言っていました。「世の中うまい絵描きさんはたくさんいて、男性でも子どもの形を本当に上手に描く人がいるけれど、多分自分のように絵を描く人はそんなに多くないと思う。」「できて感覚的に把握するのはむずかしい。自分はぐちゃぐちゃになりながら、絵と育児を一緒にしながら仕事をしてきたから、子どもというのが走ってきてぶつかる感覚や、おっぱいを吸う力、意外と赤ちゃんの握力が強いとか、子どもの重さも感覚も全部さわりながらやってきた。だから外側だけじゃなく自分自身が体験している子どもの中身みたいなものが自分の絵の中には入っているんだ。」と、話してくれましたね。

◎もっと絵を楽しむためには…



絵の前でたくさんおしゃべりすること、これは絶対に大切だと思います。例えば海の絵がある。その絵を見つめているとき無意識に海の音を聞いていることがあります。枯葉が舞っている絵があれば、木枯らしの音とか気温だとかを感じることがあります。「この絵の中にはどんな音や空気が流れているんだろう」、「この子は何を考えているんだろう」、そんなことを想像しながら絵と話をさせていただけたらと思います。

ちひろ美術館は、子どもたちが来た時にできるだけ楽しめる場所にしたいと思っています。東京はこの位の大きさが限

界ですが、安曇野は水深10cmの池で水の中に入って遊べます。走り回って、そして絵なんか見なくていいというのが僕の考えです。学校の先生が子ども達を連れてきた時に最初に言うのが「静かにしなさい、走っちゃだめ。」でも子どもは走りたかったり、お喋りしたかったりするのです。例えば「この絵は誰だろう？」「この子は何を考えているんだろう？」それを話していいよと言った時、子どもは初めて絵と話せるようになります。そんなふうにこの美術館が存在できればいいと思います。

今日お出でいただいた皆さん、ぜひお知り合いの、あるいは自分のお孫さん、お子さんを連れてこの美術館に戻っていただければ大変嬉しいです。

◎ジャズと笑顔で展示室が一杯に



感謝デイの締め括りは古今東西の名曲をピアノ（谷川賢作）とハモニカ（続木力）で演奏する「バリヤーン」のジャズライブ。谷川賢作さんは23年前にちひろ美術館でソロデビュー・コンサートを開催しており、思い出深い再演となりました。曲目は「鉄腕アトムのテーマ」や、名曲「悲しくてたまらない」のアレンジなど、親しみやすいものばかり。透き通るピアノの音色、どんどん変わる曲調、低音から高音まで5つのハモニカを使い分ける自由自在の演奏に、大人も子どもも体でリズムを感じて楽しみました。

お客様からは「ちひろのことは何も知らなかったが、原画の美しさを知ることができて良かった。生き方も参考になった。」「子ども時代にタイムスリップしたように懐かしく感じた」「入館無料の分、好きな絵本を買うことができ大満足」等、励みになるお言葉をたくさんいただきました。皆さま、ありがとうございます。

（西尾ゆう子）

